

えいあい

A I vs. ご信心

昨年、暮のご挨拶に来られた方から「A Iの時代に生きるこれからの子どもたちに、何を教えればいいのでしょうか」と話題を振られました。

A I、つまり人工知能は近い将来、人間の能力を上回ると考える人もあって、実際に仕事を奪われつつある分野もあります。将棋や囲碁の頭脳戦を制し、コンビニの無人化実験等の報道が流れ、医療分野の画像診断にも大きな期待がかかる等々、この数年でどんどん進化するコンピュータに、これから大人になる世代は働く場が奪われてしまうのでは…と心配する声が高まっているのは事実です。

そこでフト思い出したのが、昨年話題になって買ったまま、書齋に積んであった『A I vs. 教科書が読めない子どもたち』という本です。早速、読みました。

著者は私より一つ年上の数学者、新井紀子さんですが、実に端切れの良い文章で、難解な数学の理論も織り交ぜた内容ながら、分かり易く、楽しくA Iを学ぶことが出来ました。

結論から言えば、コンピュータは数式に置き換えた事象を、入力に応じて計算しますが、人が普通に感じる感覚的なことを数学で表現するのは困難で、しかもコンピュータが出した答えの「意味」を、A Iが数式に置き換えて判断するのはほぼ不可能らしく、ゆえに人間の能力をA Iが超える地点(シンギュラリティ)は来ないそうです。国家的なプロジェクトも任される数学者の言葉ですから、A Iに人が支配されることはないのだと安心しました。ただし、コンピュータが得意な分野は日々進化します。以下、新井紀子さんの弁です。

「私は日本人の読解力について大掛かりな調査と分析を実施しました。そこで分かったのは驚愕すべき実態です。日本の中高生の多くは詰め込み教育の成果で、英語の単語や世界史の年表、数学の計算などの表層的な知識は豊富かも知れませんが、中学校の歴史や理科の教科書程度の文章を正確に理解できないということが分かったのです。これはとてもとても深刻な事態です。英語の単語や世界史の年表を覚えたり正確に計算したりすることは、A Iにとって赤子の手をひねるようなことです。一方、(A Iは)教科書に書いてあることの意味を理解するのは苦手です(略)現代日本の労働力の質は、実力をつけてきたA Iの労働力の質にとっても似ています」と。

つまり、コンピュータの特性を理解して、将来的にA Iとの棲み分けができる人づくりをしないと、今の教育では大量の失業者を生むぞと警鐘を鳴らしているのです。

なるほど、ならばご信心の感性を身に付けることは、近未来の人づくりに重要な役割を果たすと感じました。そもそもご信心は、マニュアル通りの入力では結果が出ません。御宝前のお給仕も、実際にお荘厳をしたりお道具を磨くご信者の思いがご利益の顕れ方を左右します。一時間の口唱も、思いの厚薄で内容に差が出ます。御有志も体のご奉公も然り。教えや功德行が求める意味を理解して、自身の思いをどう表現するかが大切で、ために口唱や参詣も、より工夫し向上する姿勢を求めます。御法のため、他の人のために汗して励む信行が、A Iの苦手な能力を磨くのです。(『松風寺月報』平成31年2月号)